

第18回連合駿台会学術賞・学術奨励賞

【駿台懇話会の目的】

明治大学と連合駿台会が相互の情報交換と親睦を図り、母校の教育振興と地域社会の発展に寄与することを目的とする。

1. 連合駿台会学術賞

【社会科学】 ^{むらかみかずひろ}村上一博（法学部専任教授）
『日本近代法学の先達 岸本辰雄論文選集』

【人文科学】 ^{おおいしなおき}大石直記（文学部専任教授）
『鷗外・漱石—ラディカリズムの起源』

【自然科学】 ^{みむらまさやす}三村昌泰（理工学部専任教授）
『Diffusion, Cross-diffusion and competitive Interaction』

2. 連合駿台会学術奨励賞

【社会科学】 ^{かたおかひろと}片岡洋人（会計専門職研究科専任准教授）
『製品原価計算論』

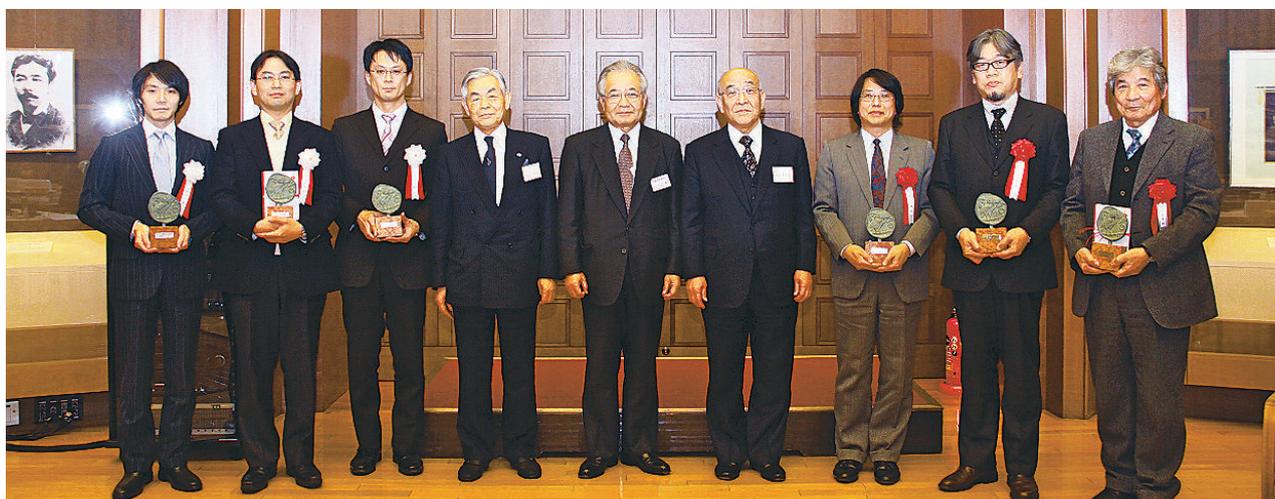
【人文科学】 ^{なかむらともかず}中村友一（文学部助教）
『日本古代の氏姓性制』

【自然科学】 ^{あいざわてつや}相澤哲哉（理工学部専任講師）
『Investigation of early soot formation process in a dieselspray flame via excitation-emission matrix using a multi-wavelength laser source (多波長レーザー光源を用いた励起発光マトリクス法によるディーゼル噴霧火炎内初期すす生成過程の調査)』



連合駿台会報

No. 302 平成24年3月15日発行
編集・発行 連合駿台会
広報委員長 中村 裕
〒101-0052 千代田区神田小川町三十二
明治大学「紫紺館」内
電話 (03) 3296-1474
FAX (03) 3296-1478
印刷 有限会社 美創



（赤い胸章＝学術賞・左から）村上一博先生、大石直記先生、三村昌泰先生
（白い胸章＝学術奨励賞・左から）片岡洋人先生、相澤哲哉先生、中村友一先生

連合駿台会学術賞・学術奨励賞を授与

新春の駿台懇話会(二月例会)

平成二十四年最初の連合駿台会例会(駿台懇話会)を、一月二十五日(水)十七時半より、明治大学リバティタワーで開催しました。山口政廣会長の挨拶に続いて、学術賞・学術奨励賞各三人の名前およびその選考経過が発表されました。そして受賞者を代表して、村上一博・法学部専任教授の受賞記念講演がありました。

講演の要旨は以下の通りです。

*

「暁の鐘の音色―岸本辰雄の精神―」

はじめに

ご紹介をいただきました、法学部の村上でございます。学部と大学院では日本の近代法制史、とくに、明治大正期にフランスやドイツから、民法や商法が日本に導入される過程、当時の民事判決原本の分析、判検事や弁護士など法曹が果たした役割について研究をしております。また、こうした専門との関係から、大学史資料センターの運営委員として、明治大学史関係の仕事にも携わっております。

この講演では、個人的には、学術賞を受賞された大石先生や三村先生、奨励賞を受賞

された若手の三人の先生方のお話を伺いたいところなのですが、私の受賞対象となった編著書『日本近代法学の先達―岸本辰雄論文選集―』が、本学の創立者である岸本先生の法学説と教育論を検討したものであることから、事務局からご指名を受けましたので、僭越ながらお引き受けした次第です。拙ない話で、皆さんがご存知の事柄も多いかと思いますし、去年十月に、福宮賢一先生と一緒に鳥取で行った、創立一三〇周年記念事業の公開講座での講演と重複する部分も多いのですが、暫くの間、お付き合いいただければ幸いです。

暁の鐘

まず、講演のテーマを「暁の鐘の音色」とした理由からお話したいと思います。皆さんご存知の明治大学校歌、その冒頭に「白雲なびく駿河台、眉秀でたる若人が、撞くや時代の暁の鐘」とあり、末尾には「いでや東亜の一角に、時代の夢を破るべく、正義の鐘を打ちて鳴らさむ、正義の鐘を打ちて鳴らさむ」という一節がございます。児玉花外による歌詞は、日本の数ある大学校歌中の白眉であり、校友の皆さんと肩を組んで歌うという胸が熱くなりますが、岸本先生について、これまで進めてきた私の仕事は、結局は、この「暁の鐘」の音色を探ることだったのではないかと思いついたからなのです。岸本先生

が、打ち鳴らされた「暁の鐘」の音色とは、どのようなものだったのか、そのことについて考えてみたいというわけです。

鳥取時代

岸本先生は、今から百六十年前の嘉永四(一八五二)年十一月八日、鳥取藩の最下級藩士の家に生まれました。父親の名は岸本平次郎、役職は作事方下吟味役、俸録は二十三俵四人扶持とありますから、食べるだけで精一杯の暮らしだったと思われれます。居宅跡の場所は、ご存知の方も多と思います。鳥取城下の東外れの「上町」、現在は市営駐車場になっていますが、この地域は元々、八百屋などが軒を連ねた町屋で、江戸後期になると下級武士たちが流入してきて、町人と武士の混在が進んだ所だったようです。絵図を見ますと、居宅は、間口二間、奥行一〇間の、質素な、いわゆる足軽長屋でした(二間は六尺〓約一八mですから、間口三・六m・奥行一八m・六五㎡)。すぐ近くには、家康を祀った因幡東照宮(現在のオウチダニ神社)があります。八百屋等町屋に囲まれた賑やかな環境で、貧しいながらも利発な辰雄少年は、神社の境内や裏山を走り回り、伸び伸びと育ったと想像されます。身分的なシガラミを微塵も感じさせない岸本先生の学問・教育姿勢は、幼年時代に過ごした、こうした環境が大きく影響しているのでしょう。この鳥取藩時代の岸本

先生については多くの先行研究がありますので、詳しくは述べませんが、岸本先生は、とくに西洋銃隊（小銃隊）の若き指導者、幕末維新期の鳥取藩にあつて、西洋式軍隊の整備という藩の存亡を担った青年の一人であつたという点を確認しておきたいと思ひます。

司法省法学学校時代

上京後の明治三年六月、箕作麟祥みづくりのりしやうという、新進気鋭のフランス学者の私塾（共学塾）に入門し、ここで、岸本先生はフランス語を本格的に学び始めたと思われませんが、その目的は、あくまで、鳥取藩のフランス式軍隊を整備するためでした。同年の一二月、鳥取藩から貢進生（明治政府が、各藩からその石高に応じて一〜三名の優秀な若者を集めようとした試み）に推されて、東京大学法学部の前身である大学南校に入學しました（鳥取藩は三十二万石の大藩でしたから、貢進生には、岸本「仏学」・村岡範為はむい馳「独学、のち京都帝大教授、初めてX線写真撮影に成功した物理学者」・藤田精太郎「独学」の三名が選ばれました）。廃藩置県後の明治四年九月、貢進生制度が廃止されたため、岸本先生は大学南校をいったん退校しますが、翌月再入學し、さらに五年八月、同校から司法省内（明法寮）に新たに設置された法学学校（これは初代司法卿の江藤新平が主導したもの）に転じました。

岸本先生は、このとき、それまでの狭い

「藩」意識から、一気に「国」へと視野を転じ、フランス法によって、明治国家の法的仕組みを構築するという、大きな志を懐いたのでしょう。司法省の法学学校では、パリ大学から招聘された御雇法律顧問のボワソナード（Boissonade）らから、始めて、本格的なフランス法教育を受けました。大学史資料センターでは、これまで、当時の学生の講義筆記ノートを収集してきましたが、こうしたノートを見ますと、彼らの語学力の高さと苦闘の跡が見出されます。この学校で、岸本先生は、宮城浩蔵（天童藩）・矢代操（鯖江藩）・磯部四郎（富山藩）・杉村虎一（金沢藩）と特に親しく交わり、五人は「明法寮の五人組」と呼ばれていたそうです。ボワソナードの推薦を受けて、四年後の明治九年七月、宮城先生・小倉久とともにフランスへの留学が決定、八月四日にフランスへ向けて出発しました。フランスのマルセイユまで当時は船で四十日程掛り、マルセイユからは汽車でパリに入ったということです。

パリ国立古文書館（Archives nationales de Paris）に、岸本先生のパリ大学学籍記録が残っています。この学籍簿によると、明治九（一八七六）年十一月五日に、パリ大学法学部（Faculté de droit de Paris）で、第一回の受講登録を行っており、その後、一度の躓きもなく順調に諸試験を突破し、三年後の

明治十二（一八七九）年十二月三日付で、首尾よく法学士号（licencié en droit）を取得、翌（明治十三）年二月二十七日に帰国しています。パリ大学では、とくに、民法担当教授のビュフノワール（Buhnoir）と、ローマ法担当教授のジイド（Gide）の指導を受けたことが、この学籍簿から読み取れますし、その他に学外では、西園寺公望の仲介で、急進的共和主義者であつたエミール・アコラス（Accolas）の私塾に通い、彼から大きな思想的影響を受けたと推測されています。

明治法律学校の創立と校長時代

フランスから帰国した岸本先生は、少し遅れて帰国した宮城先生とともに、司法省法学学校時代の同窓生でフランス留学が叶わなかつた矢代先生の求めに応じて、彼が経営に参加していた講法学会という代言人（弁護士の前身）の養成学校を手伝うことになりましたが、まもなく同校が分裂・廃止されることになり、これを契機に三人は、特に岸本先生がパリで親交のあつた西園寺公望（岸本先生と西園寺は同じ下宿でした）らと諮って、明治十四年一月、明治法律学校の創立開校に及んだのです。学校創立の目的は、三人の名前が出された「明治法律学校設立ノ趣旨」に示されています。皆さんも良くご存知のものかと思ひます。数ある私立学校の設立趣意書の中でも、もっとも格調の高い名文として知ら

れていますね。

この趣意書は、近代国家と国民にとって法がいかに重要で、個人の「権利自由」と密接に関わっているかを説き、「健訟ノ具」(濫訴の道具)に墜した法学を正して健全な法学教育を普及させるために明治法律学校を設立するのだという澁刺たる気概と情熱が溢れており、今でも我々の胸を打つ力があります。この設立趣旨の背景には、明治法律学校を設立した動機と目的が、自由民権運動の高揚とそれに対する明治政府の弾圧に屈せず、あくまでも国民の「権利自由」を普及させようとした気概が読み取れます。当時、共和制であったフランスの法学理論を学んだ岸本先生は、「共和党の黴菌」分子として官憲側から厳しく警戒されていたことも知られています。

学校を創立するため、とくに創立者の三人は、資金も工面しなければなりません。講師たちは無報酬で教壇に立ち、校舎の賃貸料も滞る始末で、特に岸本先生は鳥取藩旧藩主、銀行家や親類を頼って、学校の運営資金を借りています。裁判で、借金の返還を迫られてもいます。

らくの間、三人による幹事制がとられていたが、明治二十一年八月からは、校長・副校長制をとることとなり、岸本先生が校長に、宮城先生が副校長となりました。

この三人の創立者の役割と法学の特徴を、弦楽三重奏に例えると、私は、宮城先生がバイオリン、岸本先生がビオラ、矢代先生がチェロに当たると思います。宮城先生の刑法学は、フランス刑法学の大家であったオルトラン、その門下であるボワソナードの理論を整備発展させ、日本における近代刑法学の基礎を築いた極めて学問レベルの高い内容で、草創期の明治法律学校の、主旋律を奏でていますから、華やかなバイオリンに当たると思えます。岸本先生の民法・商法学は、近代日本の資本主義的経済活動の基本となる法的枠組みを整備する、派手ではありませんが堅実な、ビオラの音色です。矢代先生の民法学は、ボワナードから学んだ民法の基本原則を学生たちに伝え、宮城・岸本両先生の奏でるメロディーを低音域から支えて際立たせる、チェロの役割を果たしたと考えています。

明治法律学校は、代言人と判事がもつとも多く輩出される私学として、明治二十年代に入り、最初の隆盛期を迎えますが、明治二十四年四月に矢代先生、二十六年二月に宮城先生が、相次いで腸チフスで亡くなります。三人で始まった弦楽三重奏は、二人のメン

バーを失ったことから、岸本先生がバイオリンとチェロの役割も果たさなければならなくなりました。しかし、岸本校長は、井上正一(せいいち)ら、司法省法学校時代の旧友に支えられながら、この苦難を敢然と乗り切って行きます。

岸本先生は、建学理念と教育方針について、何度か演説を行っていますが、一貫して強調したのは、国民の権利意識を育成するための「法学ノ普及」の必要性です。『明治法学』という機関誌の創刊、地方における校友支部の設置も、法学普及の一環として位置付けられているのです。もちろん、法律家の養成(判検事登用試験・弁護士試験の及第)も重要課題であり、実際、多くの法曹を生み出しましたが(明治年間、弁護士と司法官の輩出者数は、中央大学に勝り我国随一の学校でした)、試験予備校に甘んじる姿勢は些かも見出されません。実定法の解釈技術の習得にとどまらず、外国法(英仏)―随意科目―を習得する必要性が常に強調されているのです。

学生に対しては、出席の励行・途中退席の禁止・羽織袴の着用など受講態度を論し、さらには、新聞を読むこと、講義の筆記に際しては全部を筆記するのでなく大要にとどめるべきことを勧めるなど、きめ細かな指導を行っています。学生の暴力行為・決闘沙汰、窃盗・詐欺あるいは淫蕩・情死といった風紀の乱れに対しては、退校処分も辞さない決然

とした態度を示して、「品行端正学業精励」こそ、校風とすべきだと訴えています。

明治三十六年八月に、明治大学（専門学校令による）と改称・改組された折りに行われた演説、「私立大学の必要及び其天職」と「明治大学の主義」では、私立学校は官立学校と全く異なる特色をもち、「独立の思想を養い自立自尊の気象を養は」ねばならず、法律政治経済といった学問は、「政府の痛痒を為すこと」と緊接しているため、私立学校にこそ似つかわしく、明治法律学校は、私学として、こうした自由と自治、独立心を持ち続けるべきことが力説されています。建学の理念が、時代の変化に対応して再解釈され、私立大学の使命として展開されていることが分ります。岸本先生が、以前よりもより力強く、一人で、明治大学の主旋律を奏で始めたのです。明治法律学校の卒業生は、全国に散り、赴任した各地で、様々な法律学校を立ち上げ、岸本先生の「法学ノ普及」の志を実践していきます。この駿河台から発せられたメロデーが校友演奏家によって、日本各地に広がっていったことは、注目すべきことです。

法局修補課・同省生徒課勤務から、太政官御用係・東京大学法学部講師・参事院議官補・法制局参事官・海軍主計学校教授などを歴任したのち、明治二十年末に司法省参事官、二十三年十一月には大審院判事へと登用されています。この間、とりわけ、彼が関わった立法事業についてみますと、十四年一月に日本海令草案審査局御用係、翌十五年三月商法編纂委員、十七年五月会社条例編纂委員、十八年三月破産法編纂委員、続いて、二十一年十一月法律取調報告委員、二十五年十月には民法商法施行取調委員に任じられています。大審院判事を辞職したのは、例の大津事件の反動とされる司法官弄花事件で懲戒裁判に掛けられたことが原因ですが、辞職後は弁護士（在野法曹）となりながら、二十七年三月に法典調査会委員、四十年五月には司法省法律取調委員と、在野法曹界の重鎮として選任されています。

岸本先生が、長年にわたって、いかに多くの商事および民事法関係（特に前者）の立法作業に関わっていたかを知ることができます。

法学説の特徴

岸本先生の法学理論の特徴についても、少しかだけお話ししておきましょう。

帰国後の早い時期、明治十年代の初期の家族法論では、婚姻契約の本質を夫婦の愛情に求め、夫婦間における対等平等な権利義務

を、性法（＝自然法）の観点から強調するとともに、旧来の家名相続と長男単独相続を封建制度の余弊として厳しく批判している点が注目されます。当時のフランス民法は、必ずしも男女平等でなく、女性差別の構造を持っていたのですが、岸本先生は、パリで個人的に学んだアコラス説に拠りながら、フランス民法より進んだ、自由で平等な家族法の実現を訴えているのです。

その後の、旧民法・明治民法および商法の編纂過程で見ると、とくに会社法の諸原則をめぐって、梅謙次郎（東京帝国大学）と激しく対立したことが知られています。優先株問題をめぐって展開された議論において、岸本は、梅謙次郎のように徹底したブルジョア自由主義、会社における経済自由主義の立場をとらず、日本社会の経済的成熟度が低いという認識に立ち、会社を法的に規制する必要性を強く訴えていることが分ります。

また、いわゆる法典論争においては、旧民法法の施行延期を求める意見に対して、反駁文を次々に発表しました。著名な施行断行論である「法典実施断行意見」など、岸本先生が中心となって明治法律学校関係者らと共に執筆した論稿は沢山あります。岸本先生の場合、従来指摘されてきたような、フランス法学のブルジョア自由主義的立場から、穂積八束に代表される半封建的官僚主義法学を批

判したものと云うよりも、裁判所における判決基準の統一や法的安定性といった、より実務的観点から法典施行の利益が主張されている点に注意する必要があるでしょう。

法典論争に敗れ、旧民法は施行延期となりましたし、加えて先ほど述べましたように司法官弄花事件に関係して大審院判事を辞職して弁護士となりましたが、それ以後は、日本弁護士協会の機関紙などを舞台に、時事法理論を展開するようになり、弁護士の社会的地位の向上に取り組みました。とりわけ、明治三十三年頃の刑法改正反対運動に、きわめて熱心に参加しています。岸本先生の刑法改正批判は、刑法改正案の官僚的で社会防衛主義的な性格への批判とともに、民商法典論争を踏まえて、一部の学者が「名利心」から法律を「玩弄物」としていること、法典の「朝令暮改」的状况に対する批判が中心となっています。

以上のように、パリから帰ってからの岸本先生の活動は、明治法律学校の教育と運営、学外では法制官僚として民法・商法の編纂、大審院判事としての裁判、そして弁護士の地位向上のための活動と、息つく暇のないほど多忙な日々だったと思われれます。そして、明治も終わろうとする明治四十五年の四月四日、大学へ向かう市電のなかで倒れ、この世を去りました。

岸本先生の主要な論稿や演説など、詳しくは、私の編著書をご覧ください。幸いですが、

むすび

岸本先生は、①日本近代法学の母胎となった司法省法学校の第一期生として、御雇法律顧問のボワソナードらからフランス法を学び、パリ大学に留学した経歴をもつ、我が国における近代法学の開拓者の一人であり、帰国後は、②民商法典その他の立法事業に関わり、近代法体制の基礎を築いた法制官僚・法学者の中核的存在でありました。また、同時に、③明治法律学校（現在の明治大学）の《生みの親》《育ての親》として法学教育に献身して多くの実務法曹を輩出した育英界の大立物であり、さらには、④大審院判事・弁護士として活躍した法曹界の元老でもあったのです。岸本先生は、近代日本における法学およびその教育の分野において、その基礎を築き、健全な法と権利意識の発達を夢見た、明治と云う時代に、燦然と輝いた大先達だったことは、もはや疑う余地がありません。国家を想う気概、志の高さと深い西欧法理解は、感嘆に値します。

私の岸本研究は、これまで積み重ねられてきた明治大学史の研究を基礎に、私の専門の立場から新たな資料を少し加え、さらに、岸本先生の法学説を、近代日本の法学説史上に位置づけたにすぎません。

岸本・宮城・矢代の三先生が奏でた、暁の鐘の三重奏は、その後、次第に演奏者の数を増し、今日では教職員千五百人を擁する大オーケストラとなり、日本各地に広まった鐘の音は、今や世界に広がるものとしています。しかし、岸本先生の精神は、時代の要請に対応して自在にメロディーは変化しながらも、明治大学の根底・骨髄を貫く、基調旋律あるいは通奏低音として、これからも生き続けていくであろう、生かし続けていかねばならないと思うのです。

◆新入会員ご紹介

前回までの理事会で承認され、入会された方をご紹介します。（敬称略・到着順）



あきやま ごろう
秋山 五郎
昭和五十年・経営学部卒
㈱ハーフェンチユリーモア 取締役
東京都世田谷区在住



うへだ としあき
上田 利昭
昭和四十三年・法学部卒
㈱チュチュアンナ 代表取締役
大阪市城東区在住



岩田 守弘
昭和三十九年法学部卒
びわ湖放送(株) 監査役
滋賀県大津市在住



小山 修
昭和四十三年商学部卒
小山修税理士事務所 代表
埼玉県吉川市在住



福見 勉
昭和六十三年政経学部卒
福見産業(株) 代表取締役社長
東京都渋谷区在住

◆ 訃報

会員の鈴木成裕氏（昭和二十八年・文学部卒、(株)現代経営技術研究所代表取締役所長）が、平成二十四年二月十五日に逝去されました。享年八十四歳。
ご冥福を心からお祈り申し上げます。

◆ 明大ニュース

● 二〇二二年度一般入試

志願者数十二万人超、三年連続で日本一

二〇二二年度の明治大学九学部の入学試

験は、大学入試センター試験後期日程（三月五日出願締切、十四・十五日合格発表）を除いて終了した。長引く不況の影響を受けつつも、各種推薦・特別入試を除く総志願者数は十一万二千三百四十二人（二月二十二日現在）で、三年連続で十一万人を超えたとともに六年連続で十万人を超えた。

● 新評議員七十一人が就任

明治大学の最高意思決定機関である評議員会を構成する評議員の任期が二月二十三日で満了となり、二月二十四日から新評議員七十一人が就任した。

新評議員は、学校法人明治大学寄附行為第十七条第二項第一号に定める職務上の評議員十一人（学部長、大学院長および高等学校長兼中学校長）と、各機関から選出された銓衡委員三十一人で構成される評議員銓衡委員会の選任による評議員六十人（教員十人、職員五人、校友二十五人、学識経験者二十人）の計七十一人。うち二十三人が新任、四十六人が再任、二人が元評議員となった。

新評議員のうち評議員銓衡委員会の選任による評議員六十人は、一月二十日と三十日に開催された同委員会で銓衡され、二月七日に武田宣夫委員長から長堀守弘理事長へ通告があり、二月八日付で公示された。

新評議員による第一回評議員会は、三月

二日に開催され、議長および副議長の選任、理事長・理事および監事候補者の選任にかかる銓衡委員の選出等が行われる。

なお、新評議員の任期は四年間で、職務上の評議員を除き二〇二二年二月二十四日から二〇二六年二月二十三日まで。

◆ 新評議員紹介

（敬称略・五十音順・年齢は三月一日現在）

青柳 勝栄 (再)

一九六六年経営学部卒・七十歳

(株)理経代表取締役社長

坪 昌二 (再)

一九六二年商学部卒・七十三歳

T C I(株)代表取締役

浅川 光 (新)

一九八二年政経学部卒・五十三歳

職員・中野キャンパス準備事務長・参事

安部 悦生 (再)

一九七三年東京都立大学卒・六十二歳

経営学部教授・同学部長

飯田 和人 (再)

一九七二年商学部卒・六十四歳

政治経済学部教授

飯田 年穂 (再)

一九七一年国際基督教大学卒・六十三歳

政治経済学部教授・和泉委員会委員長

石川 日出志 (新)

一九七八年文学部卒・五十七歳

文学部教授

石橋 良一 (再)

一九七九年農学部卒・五十六歳

税理士法人あい&ゆう税務会計事務所代表社員

市川 好和 (再)

一九七〇年法学部卒・六十四歳

施設計画担当常勤理事

岩田 守弘 (新)

一九六六年法学部卒・六十八歳

びわ湖放送(株)監査役、校友会副会長

植木 榮 (再)

一九六五年文学部卒・六十九歳

(株)タイムス代表取締役会長

大田原 健司 (再)

一九七六年政経学部卒・五十八歳

職員・募金室長・参事

大原 幸男 (新)

一九七四年商学部卒・六十二歳

H O Y A サービス(株)代表取締役社長

風間 信隆 (新)

一九七四年武蔵大学卒・六十歳

商学部教授

梶原 豊 (再)

一九六一年政経学部卒・七十三歳

(社)中高年齢者雇用福祉協会監事

蟹瀬 誠一 (再)

一九七四年上智大学卒・六十二歳

国際日本学部教授・同学部長

金子 光男 (再)

一九六七年政経学部卒・六十八歳

政経学部教授・明治高等学校校長兼中学校長

岸上 謙司 (新)

一九八二年商学部卒・五十三歳

職員・教学企画事務長・参事

木村 健一 (再)

一九八八年政経学部卒・四十五歳

アサガミ(株)代表取締役社長

倉田 武夫 (再)

一九六八年工学部卒・六十六歳

理工学部教授

小林 一光 (再)

一九六〇年農学部卒・七十四歳

金印(株)代表取締役会長、理事

小山 修 (再)

一九六八年商学部卒・六十五歳

小山修税理士事務所代表

齋藤 柳光 (新)

一九六七年文学部卒・六十七歳

(株)メディアアンド取締役会長、校友会副会長

笹田 学 (再)

一九七六年政経学部卒・五十八歳

フォーオールクラブ(株)代表取締役社長

佐藤 政光 (新)

一九七六年文学部卒・六十一歳

商学部教授

眞田 瞳 (再)

一九五八年法学部卒・七十六歳

(有)サンビルデイス監査役

椎名 茂樹 (新)

一九六〇年政経学部卒・七十五歳

千葉港運倉庫(株)顧問

清水 秀夫 (再)

一九六六年商学部卒・六十八歳

総務担当常勤理事

杉山 民二 (再)

一九七〇年農学部卒・六十四歳

農学部教授

鈴木 銀治郎 (再)

一九七四年法学部卒・六十歳

準あすか法律事務所パートナー弁護士、校友会副会長

鈴木 紘一 (再)

一九六八年商学部卒・六十六歳

京王電鉄(株)嘱託

鈴木 利大 (新)

一九七二年政経学部卒・六十二歳

政治経済学部教授

大六野 耕作 (再)

一九七七年法学部卒・五十八歳

政治経済学部教授・同学部長

高地 茂世 (再)

一九七五年法学部卒・五十九歳

法学部教授・同学部長

高山 茂樹 (新)

一九七八年政経学部卒・五十六歳

職員・研究推進部長・参事

武田 宣夫 (再)

一九六五年商学部卒・七十歳

元(株)丹青社専務、(株)日商インターライフ取締役

田中 等 (新)

一九七三年法学部卒・六十一歳

丸の内南法律事務所代表弁護士

田村 駿 (新)

一九六五年商学部卒・六十九歳

イハラケミカル工業(株)監査役、元共栄火災海上

上保険(株)代表取締役社長・会長

辻 嘉右エ門 (再)

一九六四年法学部卒・七十一歳

校友会副会長

土屋 一雄 (新)

一九六九年工学部卒・六十五歳

理工学部教授・研究企画推進本部長

中川 敏洋 (新)

一九七二年経営学部卒・六十三歳

三井住友海上火災保険(株)常勤監査役

中村 義幸 (再)

一九七一年法学部卒・六十三歳

情報コミュニケーション学部教授、理事、

校友会副会長

中山 真一 (新)

一九八六年文学部卒・四十八歳

職員・生田就職キャリア支援事務長・副参事

納谷 廣美 (元)

一九六二年法学部卒・七十二歳

法学部教授・学長

南保 勝美 (新)

一九七九年法学部卒・五十五歳

法学部教授・同法律学科長

野口 昌宏 (再)

一九六二年商学部卒・七十三歳

公認会計士野口昌宏事務所長

橋口 隆二 (再)

一九六三年商学部卒・七十二歳

財務担当常勤理事

林 務 (再)

一九五九年商学部卒・七十五歳

(有)林健商店代表取締役、校友会監査委員

林 義勝 (再)

一九七二年南山大学卒・六十三歳

文学部教授・同学部長

早瀬 文孝 (再)

一九六九年東京農工大学卒・六十五歳

農学部教授・同学部長

針谷 敏夫 (再)

一九七五年東京大学卒・五十九歳

農学部教授・総合政策担当副学長

日高 憲三 (再)

一九六〇年政経学部卒・七十四歳

経営企画担当常勤理事

平井 克彦 (元)

一九六八年経営学部卒・六十八歳

経営学部教授

福宮 賢一 (再)

一九六九年商学部卒・六十五歳

商学部教授・社会連携担当副学長

舟橋 達彦 (再)

一九七一年工学部卒・六十四歳

電気通信大学特任講師

細野 はるみ (再)

一九七二年東京学芸大学卒・六十二歳

情報コミュニケーション学部教授・同学部長

前川 一郎 (再)

一九六〇年法学部卒・七十五歳

(社)東京滋賀県人会顧問、校友会相談役

松崎 優子 (新)

一九七三年短期大学法律科卒・五十九歳

NPO法人みなみ理事

松橋 公治 (再)

一九七八年東京都立大学卒・五十八歳

文学部教授・学務担当副学長・学生部長

松本 隆栄 (新)

一九七七年文学部卒・五十七歳

職員・学生支援部長・参事

真野 孝志 (新)

一九六〇年政経学部卒・七十五歳

富士商会(株)顧問、校友会副会長

丸山 律夫 (新)

一九六五年工学部卒・六十九歳

岡谷電機産業(株)代表取締役会長 (CEO)

三木 一郎 (再)

一九七三年工学部卒・六十一歳

理工学部教授・同学部長

向井 眞一 (再)

一九七一年経営学部卒・六十四歳

(株)内田洋行名誉会長、校友会副会長

村田 嘉一 (再)

一九六三年商学部卒・七十歳

(株)日立製作所名誉顧問、理事

森 久 (再)

一九七三年商学部卒・六十一歳

経営学部教授

山上 雅隆 (新)

一九六八年法学部卒・六十六歳

大日本商事(株)顧問

山口 政信 (新)

一九六九年東京教育大学卒・六十五歳

法学部教授

山口 政廣 (再)

一九六〇年政経学部卒・七十四歳

共同印刷(株)相談役、校友会副会長

横井 勝彦 (再)

一九七七年商学部卒・五十七歳

商学部教授・同学部長

吉村 武彦 (再)

一九六八年東京大学卒・六十六歳
文学部教授・大学院長

● 評議員二十年在任

評議員永年勤続で二氏を表彰

学校法人明治大学の評議員永年勤続表彰が二月二十三日、駿河台キャンパス紫紺館四階で行われ、一九九二年から五期にわたって評議員を務めた長堀守弘評議員(≡理事長)と百瀬恵夫評議員(≡名誉教授)の二氏に賞状と記念品が贈られた。

● 長堀理事長ら「明治大学発祥の地・記念碑祭」に参列

長堀守弘理事長をはじめ大学役員・役職者は一月十四日、明治大学発祥の地である東京都千代田区有楽町で行われた「明治大学発祥の地・記念碑祭」に参列した。

これは、明治大学開学のルーツに触れ母校のますますの発展を祈念するとして、校友会東京都南部支部が開催したもの。

式典は、千代田地域支部の米山耕右支部長のあいさつで開会した。

あいさつに立った長堀理事長は会を祝すとともに、昨年実施された創立一三〇周年の諸記念行事への協力に感謝の言葉に続け、「二十年後の創立一五〇周年を見据え、明大らしく国際性を推進させていくことが重要

だ」と述べ、母校への一層の支援を呼びかけた。

● 第三回明治大学連合父母会文学賞

倉橋由美子文芸賞大賞は赤塚絵理さん

阿久悠作詞賞大賞は松原瞳さん

第三回明治大学連合父母会文学賞の表彰式が二月二十日、駿河台キャンパス紫紺館で開かれた。倉橋由美子文芸賞大賞に、赤塚絵理さん(理工研M2)の「魔法使いの庭」が、阿久悠作詞賞大賞には松原瞳さん(文2)の「朝は来る」が選ばれた。倉橋由美子文芸賞大賞作は芸術評論誌『ユリイカ』(青土社)三月号に掲載される。

● 二〇二〇年公認会計士試験

現役合格者二十八人に報奨金授与

明治大学国家試験指導センター経理研究所(所長≡森久経営学部教授)は一月十三日、二〇二〇年度公認会計士試験現役合格報奨金授与式を、駿河台キャンパス・リバティタワー二十三階の岸本辰雄ホールで執り行った。

今回報奨金を授与されたのは、法学部・商学部・政治経済学部・文学部・経営学部、および大学院経営学研究科の在学生二十八人(うち同研究所の会計特別研究室に所属する室員は二十六人)。

● 明治大学国際総合研究所 開設記念シンポジウム開催

明治大学国際総合研究所は二月二十一日、開設記念シンポジウムを駿河台キャンパス・リバティホールで開催した。シンポジウムは、同研究所の研究テーマである世界経済、外交・安全保障、医療改革、コーポレートガバナンス分野で、世界をリードする研究者や識者らが最新事情や問題点を議論、近未来の針路を探った。会場には学生や研究者など五百人以上が集まった。

● 観光立国論文コンテスト

政経学部・新田ゼミ落合さんらのチームが
最優秀賞（観光庁長官賞）受賞

政治経済学部四年の落合良さんはじめ五人からなる新田功ゼミBチームが一月三十一日、「第一回 観光立国・学生懸賞論文コンテスト」で最優秀賞（観光庁長官賞）を受賞し、その表彰式が二月二十一日に東京国際展示場（東京・有明）で行われた。

● 川崎国際環境技術展2012

生田キャンパスの取り組みがエコ大賞

明治大学生田キャンパスの「省エネ・創エネ」の取り組みが『かわさき環境ショーウィンドウ大賞』を受賞した。授賞式は二月十一日、川崎市が最先端の環境技術やノウハウ

を広く国内外に発信することを目的とした「川崎国際環境技術展2012」（同市内とどろきアリーナ）の中で執り行われた。

● 第二回明治大学・高麗大学国際学術会議 「東アジアの中の韓国と日本」をテーマに

明治大学大学院は一月二十六～二十七日に駿河台キャンパス・リバティタワー十六階で、高麗大学校文科大学と共催で「第二回明治大学・高麗大学校国際学術会議」を実施した。昨年三月二十九日～三十日に韓国・ソウルの高麗大学校で行った第一回の学術会議をうけて開催したもの。

● 「なでしこジャパン」佐々木則夫監督

FIFA女子最優秀監督賞

本学校友で体育会サッカー部OBの「なでしこジャパン」佐々木則夫監督（一九八一年・文学部卒）が、FIFA（国際サッカー連盟）より、スイス・チューリッヒで一月十日（現地時間九日）に行われたFIFAバロンドール2011の『FIFA年間女子最優秀監督賞』を受賞した。

同賞の日本人監督による受賞は史上初で、アジア地域からの受賞としても初の快挙。

● 「植村直己冒険賞」受賞者発表

明治大学が誇る世界的な冒険家・植村直

己氏（一九六四年・農学部卒）を讃えて創設された2011「植村直己冒険賞」の受賞者発表が二月十六日、駿河台キャンパス紫紺館で開催され、ヨットで単独「最高齢・最多」世界一周を達成した斉藤実氏が受賞した。

● 競走部 第八十八回箱根駅伝

四十九年ぶり総合三位でゴール

第八十八回東京箱根間往復大学駅伝競走が一月二・三日、東京・大手町と箱根・芦ノ湖を往復する十区間217・9キロコースで行われ、明治大学体育会競走部は総合タイム十一時間二分五十秒の総合三位となり、一九六三年大会以来四十九年ぶりのトップ3入賞を果たすとともに、四年連続となるシード権を獲得した。

これにより、昨年十一月に八位と振るわなかった全日本大学駅伝のシードを獲得。二〇一二年度も学生三大駅伝大会への出場を決めた。

◆ 駿台トピックス

● 連合駿台会オープンゴルフコンペを開催

第三回目になるオープンゴルフコンペが、三月十日・十一日に、初の泊まりがけで開催されました。コンペ前夜の十日は、宿泊先の「いこいの村たてやま」で新鮮な海の幸に舌鼓を打ち、その後はカラオケも交えた賑やか

な懇親会となりました。翌日は天候にも恵まれ、館山カントリークラブ（当会の中村欣治会員が理事長）にて、六組・二十一名が参加してコンペが行われました。

当日は東日本大震災一周年に当たするため、震災発生の午後二時四十六分には全員で黙とうを行い、犠牲者に哀悼の意を表しました。

新ペリア方式による成績結果は、優勝が宮下隆会員（昭和五十三年・政経卒）、準優勝は宇川一

夫会員（昭和四十七年・政経卒）、三位が中村欣治会員（昭和三十三年・政経卒）で、陶芸家の武内裕会員から寄贈された陶器が副賞として贈られました。またこの日の「特別当日賞」（木村



事業委員長から寄贈のキャディバッグセット）は、十一位になった室井恵明会員（昭和六十二年・文卒）に贈呈されました。

◆駿台懇話会出席者

秋山隆敬、坪昭二、浅井宏、飯塚佳央、石川かおり、石橋良一、植木榮、上西紘治、上野拓史、宇川一夫、内田八郎、海野美津雄、浦弘之、江成健一、大原幸男、大村託現、大山卓良、小野寺弘三、笠井正弘、勝俣正義、荏部彰夫、河合秀二郎、木野幸士、木下重次郎、清野明男、日下豊顕、黒子昇、古賀慎一郎、小柴和弘、小林一光、小林正明、根田哲雄、斉藤春夫、斉藤弘之、斎藤柳光、佐藤和正、佐藤健、真田瞳、同ご友人、真貝達朗、同ご友人、鈴木勝利、鈴木隆志、鈴木俊光、相臺志浩、園田英次、高澤徹、高見真一、武田宣夫、武原誠郎、田村駿、天童美德、同ご友人、長岡信裕、中川敏洋、中西幹育、中丸眞治、中村欣治、中山智夫、並木洋一、西尾勝治、西山武夫、二宮充子、二宮忠、橋口隆二、蓮池信之、長谷川進一、原田榮、日高憲三、比良田幸雄、福田和彦、福山紘太郎、富士豊、藤巻伴英、舟橋達彦、松浦一、摩尼和夫、真野孝志、丸山律夫、向井眞一、向殿政男、向山勝、村岡健、村瀬尚男、山口政廣、山田憲典、山田朝彦、山田幸夫、湯川孝則、吉村國廣（計九十人）

【編集後記】

未曾有の東日本大震災から二年が経ちました。「日本はひとつ」で一日も早い復旧・復興を心からご祈念申し上げます。

今年一月、東大学長の「秋入学の導入構想」の発表で、日本の大学にもグローバルバリエーションの波が押し寄せ社会を揺さぶり始めました。大衆化、少子化に続いての国際化で、全入時代、就職予備校と化した大学を本来の姿に戻し、質の向上と共に企業も青田買いを止め、採用慣行を根底から変えることが、結果として我が国企業の国際競争力をも強化する大きなターニングポイントになるでしょう。秋入学は世界のグローバル・スタンダードであり、留学生の受け入れ、送り出しはもとより、海外との研究、教員の交流も円滑に進む利点があります。学生も四年生までは就活の必要はなく、学業に専念でき、異文化への理解力やコミュニケーション能力を持ったグローバル人材育成にも繋がります。

母校は既に全体で約千二百名の留学生を受け入れており、国際日本学部はこの三月に初の卒業生を送り出します。そして次の一五〇周年に向け、「長期ビジョン」に基づいて更なるハード・ソフトの充実をはじめ、国内外で活躍できる人材育成でトップグループの大学を目指しております。秋入学をキーワードに、今後の日本は大学のみならず会計年度も含めて、国、社会全体が大きく変わるきっかけとなり、国民的関心が高まってくるでしょう。

大学・校友会・連合駿台会が一丸となって、明治大学の総合力を更に発揮する新年度であることをご祈念致します。

（有賀 隆治）